

令和 4 年 5 月 21 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00752

研究課題名(和文) 第二言語習得における学習メカニズムと諸要因(学習条件・個人差)の相互作用

研究課題名(英文) The Interactional Relationship between Learning Mechanisms and Other Factors (Learning Conditions/Individual Differences) in Second Language Acquisition

研究代表者

小柳 かおる (Koyanagi, Kaoru)

上智大学・言語教育研究センター・教授

研究者番号：90306978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランス人大学生の日本語習得における個人差要因および要因間の相互作用が、日本語の熟達度とどのような関係にあるかを調べたものである。基本的な認知能力である言語適性は直接、L2熟達度に、動機づけは学習努力の意思につながっていたが、学年が上がると言語適性の影響は薄れ、動機づけの方が熟達度への説明力が高くなる傾向も見られた。また、学習者のピルーフが動機づけや学習ストラテジーの使用にも相互作用があることが明らかになった。本研究で、第二言語習得が様々な要因が絡み合う複雑なプロセスであることを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第二言語習得に学習者の個人差要因(言語適性や動機づけなど)が影響を及ぼし、習得の成果には学習者間の違いが大きいことは周知の事実である。しかし、これまで、それぞれの個人差要因は単独で研究されることが多く、それらの相互作用についてはあまり調べられていなかった。本研究はフランス人大学生の日本語学習という特殊なコンテキストであるが、個人差要因の相互作用の一つの事例を示すことができた。また、近年、複雑系理論という、様々な要因の相互作用、さらに環境との相互作用によって新たな体系が形成されていく仕組みを説明する理論が、第二言語習得にも適用されるようになり、そのような潮流にも沿った研究である。

研究成果の概要(英文)：This study explored how individual differences and their interactions between these variables would affect Japanese L2 proficiency in French university students. Language aptitude or fundamental cognitive abilities led to L2 proficiency directly, whereas motivation led to intended learning efforts. However, there is a tendency that academic year levels advance, the impact of language aptitude was minimized, and motivation predicted L2 proficiency. In addition, it was found that learners' beliefs about language learning interacted with motivation and language learning strategy use. This study showed that second language acquisition is a complex process, involving various factors.

研究分野：第二言語習得 日本語教育 外国語教授法

キーワード：第二言語習得 個人差要因 言語適性 動機づけ ピルーフ 学習ストラテジー フランス人大学生

## 1. 研究開始当初の背景

第二言語習得 (Second Language Acquisition, 以下 SLA) において、根底にはインプットからアウトプットに至る学習者の認知的なメカニズムが存在し、そこに教室指導のタイプや学習者要因 (特に言語適性) などの様々な要因が習得の成果に影響を及ぼしている。認知的な学習メカニズムは注意や記憶を伴い、それは、どの学習者にも共通の普遍的なものであるが、同時に、そこに持ち込まれる学習者の基本的な認知能力 (= 言語適性) には個人差が大きい。また、習得の成果に影響を及ぼすのは、言語適性のみならず、動機づけや学習ストラテジーなど様々な要因が絡み合っていると考えられる。そこで、そのような複雑な要因間の相互作用を一つ一つ解き明かしていくことが必要だと考えた。

日本国内の日本語学習者は、来日以前の学習背景が様々で、また国内にあっても教室外の日本語との接触時間などが学習者間で著しく異なるため、条件を統制したデータ収集を行うのが難しい。よって、本研究者の在外研究期間を使い、フランスに滞在中にデータを収集し、できるだけ学習背景が似通っている外国語環境の学習者を対象に、個人差要因の相互作用を調べる研究を行うこととした。

## 2. 研究の目的

### (1) 動機づけの内部構造

「L2 動機づけの自己システム (L2MSS)」(Dörnyei, 2005) に基づき、L2MSS の主要な動機づけのソースとされる「理想的自己」「義務的自己」「第二言語 (L2) 学習経験」と動機づけがあることを示す基準変数として「学習努力の意思」、さらに客観的な指標としての熟達度との関係を調べた。理想的自己とは将来なりたい自分の特性で、義務的自己とは期待に応えるため、または否定的な結果を回避するために有すべき特性で、その特性に L2 の熟達度が含まれるなら、そのギャップを埋めようとする意欲が動機づけの原動力になるとされる。L2 学習経験もまた動機づけの形成に影響を及ぼすと考えられる。これらの変数の先行要件や、動機づけられた行動との関係を調べた。

### (2) 個人差 (言語適性と動機づけ) と習得との関係

思春期を過ぎた大人の学習者の習得の成否には、言語適性と動機づけが大きく関わっている。しかし、言語適性と動機づけのどちらがより重要か、習得のプロセスでそのバランスが変化するのかなど、まだ明らかになっていないことも多い。よって、本研究では両方のデータを同時に収集して、両者が日本語能力の発達過程にそれぞれどのような影響を及ぼしているのかを探った。

### (3) 個人差の主要因 (言語適性と動機づけ) と他の個人差要因 (ビリーフ、学習ストラテジー) との相互作用

学習者は、言語学習はこうあるべきというようなビリーフ (信念) を有するとされる。そのようなビリーフは、学習者の言語学習における行動にも影響を与えられ、先行研究では、ビリーフと動機づけ、ビリーフと学習ストラテジー、動機づけと学習ストラテジーの関係についての研究が始まっている。本研究で集めた個人差データを基に、ビリーフと学習者の動機づけ、学習ストラテジー、さらに言語適性とどのような関係があるのかを調べた。近年は、「複雑系理論 / ダイナミックシステム理論 (DST) (Ellis, 2008; Larsen-Freeman, 2012 等) が SLA にも適用されるようになってきている。この理論では、様々な要因の相互作用が共鳴し、さらに、それらと環境が相互作用して学習者の複雑な言語体系が構築されると捉えられている。よって、個人差要因間の関係を調べることは重要であると考えた。

## 3. 研究の方法

### 3-1 参加者

参加者はフランスで日本語・日本研究を専攻する大学生 121 名であった。フランスの大学の学部の修学期間は 3 年で、入学後 2 学期目の 1 年生 61 名、4 学期目の 2 年生 35 名、5 学期目の 3 年生 25 名から横断的にデータ収集を行った。調査への参加は任意であった。

### 3-2 研究のコンテキスト

データ収集を行なった大学は、古くは外交官を養成する外国語学校を起源とし、今でも人文系の研究者を養成することを教育目的として掲げている。大学 3 年終了時には、日本語能力試験の N2 レベルに到達することを目指しており、海外、特にヨーロッパにあって集中的な日本語プログラムを展開している大学である。伝統的に漢字や読解教育に定評があるが、プログラムの中では会話の時間も設けられている。フランスの首都という土地柄、日本文化に触れる機会 (美術展、

映画館、日本食レストランのアルバイトなど)は比較的多い。また、SNSを活用して、日本人との交流がある学生もいた。大学入学以前に英語はすでに学んでおり、英語の熟達度を上級と自己評価した参加者が最も多かった。また、英語以外のスペイン語、ドイツ語など第3言語の学習歴のある参加者が多かった。

### 3-3 調査材料

本研究で収集したデータは以下の通りである。

#### <言語適性テスト>

- ・明示的学習能力：LLAMA 言語適性テスト (F) (Maera, 2005)
- ・暗示的学習能力：言語適性テスト (D) (Granena, 2013)
- ・作動記憶 (WM) の容量：リーディングスパンテストのフランス語版 (亭阪, 2000)
- ・処理速度：Woodcock-Johnson III Tests of Cognitive Abilities (Visual Matching)
- ・呼称速度：音韻処理能力のテスト (CTOPP) のサブテスト
- ・音韻的短期記憶：CTOPP の非単語再生課題

#### <動機づけの質問紙>

「L2 動機づけの自己システム (L2MSS)」のモデルに依拠して Dörnyei (2010) が公開している質問紙の中から項目を選定し、フランス語版を作成した。

#### <ビリーフの質問紙>

Horwitz (1988) が開発し、様々な言語の研究で用いられてきた BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) のフランス語版を作成した。回答はリッカート尺度による5段階評価であった。

#### <学習ストラテジーの質問紙>

Oxford (1990) が開発した SILL (Strategy Inventory for Language Learning) をフランス語に訳して使用した。回答はリッカート尺度による5段階評価であった。

#### <L2 熟達度>

オンライン方式の J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) を用いた。J-CAT は旧日本語能力試験の問題を項目バンクとして、項目応答理論に基づいて開発されたコンピュータ適応型テストである。読解、聴解、語彙、文法、合計点のスコアが自動的に算出された。

また、絵描写テストにより発話データも収集した。これは CAF (複雑さ、正確さ、流暢さ) の観点から分析された。

## 4. 研究成果

(1) 動機づけ (L2MSS) の質問紙の各指標と、基準変数である「学習努力の意思」「学外行動」「J-CAT (聴解、読解、総合点)」との相関分析を行なった。その結果、動機づけの原動力となるとされる「L2 学習の経験」は、学習努力の意思に対して最も高い相関が見られ、ついで「理想的 L2 自己」も学習努力の意思との相関が高かった。しかし、これらは J-CAT や学外行動とは相関が見られなかった。また、義務的自己はいずれの基準変数とも相関は見られなかった。

相関が見られた指標については、さらに回帰分析を行なった。その結果、理想的自己と L2 学習の経験を合わせると学習努力の意思の予測変数 ( $R^2=.23^{**}$ ) となることが明らかになった。理想的自己と L2 学習の経験それぞれが学習努力の意思につながるだけでなく、L2 学習の経験が理想的自己にも影響を及ぼすというルートもあることが分かった。これは、先行研究には見られなかった結果である。本研究の参加者は日本語・日本研究専攻の大学生であるため、L2 学習経験を肯定的に捉えることが理想的 L2 自己の形成にも寄与していたと考えられる。

動機づけの指標と J-CAT で測定した熟達度との関連は見られなかったことから、熟達度を予測するのは言語適性など他の要因の方が強く関わっていると考えられる。

(2) 言語適性は直接、言語の熟達度につながり、動機づけは学習を継続する意思に反映され、間接的に熟達度につながるとされている (Al-Hoorie, 2018)。しかし、動機づけが到達度に影響すると見る研究者や、レベルが上がるにつれ言語適性の影響が薄れるとする研究者もあり、見解の一致を見ているわけではない。そこで、学年別にデータを分析したところ、1年生から3年生まで共通して、読解と言語適性の構成要素の一つである処理速度との相関が顕著で、特に2~3年生では読解スコアの説明変数となった。3年生になると、J-CAT の聴解や総合点は、言語適性より動機づけの方がスコアへの説明力があることも明らかになった。外国語環境で教室だけで聴解力を上げるには限界があると思われ、動機づけが高い学習者の方が、教室外でも日本語に触れる機会を求めているという可能性がある。

言語適性と動機づけの関連を調べたところ、2年生にのみ、言語適性の構成要素の一つである呼称速度と理想的自己、学習努力の意思との負の相関が見られた。すなわち、音韻処理が迅速で

あるほど、理想的自己をしっかりとイメージでき、学習継続の意思も強いと言える。2年生は、呼称速度が J-CAT の説明変数にもなっていた。しかし、このような言語適性と動機づけの相互作用は、2年生のみにしか見られなかったことになる。

本研究の参加者は、フランスの大学で日本語・日本研究を専攻しているので、言語適性や動機づけは元々高い集団で、個人差の幅が小さくて統計上の有意を見出しにくかったという可能性がある。また、発話データの分析が完了しなかったために、分析には口頭能力を含めることができなかった。習得の成果としてのアウトプットである発話を調べると、異なる結果が出るかもしれない。

(3) ビリーフ研究で広く使用されている質問紙 BALLI( Beliefs About Language Learning Inventory ) (Horwitz, 1988)は、本来、言語学習に関わる様々な問題に関する学習者の意見を評価するために開発されたもので、記述統計で言語間、学年間などの比較をするために主として用いられてきた。しかし、Yang (1999) は、そこから4つの因子を抽出しており、本研究でもそれに沿って、「自己効力感ビリーフ」「口頭スキル重視のビリーフ」「外国適性に関するビリーフ」「言語形式指導に関するビリーフ」の項目を抽出した。そして、学習ストラテジー( SILL)と動機づけ( L2MSS) の質問紙の指標との相関、並びに言語適性データと J-CAT のスコア( 聴解、読解、総合点)との相関も調べ、学習者の個人差要因間の相互作用を調べた。( 本課題では、3 学年のデータを統合し、J-CAT のスコアは Z 値を用いて分析した。)

その結果、自己効力感ビリーフと口頭能力重視のビリーフは、学習ストラテジーの使用、および動機づけの説明変数になることが明らかになった。また、動機づけは学習ストラテジーの使用にもインパクトを与えていることが分かった。しかし、言語適性については、動機づけと学習ストラテジーとの相関は見られなかった。さらに、言語適性が L2 熟達度の説明変数になったのは、処理速度と聴解の関係のみで、それ以外の言語適性の構成要素は熟達度への説明力はなかった。一方、学習ストラテジーの中でも認知ストラテジーと形式重視のビリーフは双方合わせて、J-CAT の読解と総合点に対する説明力があることが明らかになった。

よって、自己の能力を確信し、口頭能力の習得が重要だと考える学習者は、動機づけが高く、学習ストラテジーも多用しているようである。一方で、L2 熟達度に関しては、文法や語彙の学習が重要だと考える学習者の方が、J-CAT で測定した読解や文法も含めた総合力につながっているという結果になっている。これは Yang (1999) の台湾の EFL 学習者の調査と同様の結果で、外国語学習環境におけるフランス人大学生の日本語学習において、自己効力感ビリーフや口頭能力が重要というメタ認知的ビリーフがあると、積極的に学習に取り組んではいるが、テストにおいては伝統的な言語形式重視のビリーフがある方が、多肢選択問題による熟達度のテストにおいては高得点につながっていると言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kaoru Koyanagi	4. 巻 9
2. 論文標題 The interactional relationship between learning mechanisms and other factors (learning conditions and individual differences) in second language acquisition	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 IMPACT	6. 最初と最後の頁 29-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21820/23987073.2020.9.29	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小柳かおる	4. 巻 70
2. 論文標題 日本語学習者の口頭産出データの分析単位に関わる諸問題 - 英語のAS (Analysis of Speech)-unitの日本語への応用 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Sophia Linguistica	6. 最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 小柳かおる
2. 発表標題 第二言語習得過程における日本語学習者の動機づけの形成過程
3. 学会等名 日本語教育国際研究大会2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小柳かおる
2. 発表標題 第二言語の学習メカニズムから教師の役割を考えるー教室指導の効果と学習者の個人差ー
3. 学会等名 第18回マレーシア日本語教育国際研究発表会（ICJLEM2021）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------